

井の頭自然文化園開園 70 周年記念
「わたしと井の頭自然文化園」エッセイ

思い出賞：原眞澄



私と井の頭自然文化園

東京へ転校してきて四年目の中学一年の春休み。

もう四十五年前のことになります。

……その中学一年のクラスは、学校の行事すべて優勝という元気で団結したクラスでした。三学期、クラス替えが嫌で、クラスメイトで全校をまわって、反対署名運動をしましたが、そんなわがままが通るわけがなく、春休みを迎えました。

クラスで井の頭公園へ行こうということになり、東京の地理のよくわからない私はみんなについて行きました。

小金井を出発して、なんと歩いて井の頭自然文化園へ行くということです。

当時は、全員が自転車を持っているわけでもなく、おこづかいが豊富な子は少なく、なるべくお金をかけない徒歩遠足がはじめてから決まっていたようです。

歩いて行くにはけっこう時間がかかりましたが、早春の明るい陽ざしに恵まれ、梅や水仙が花盛りの園に到着。動物を見たり、遊具に乗ってはしゃいだり、はしゃぎすぎてコーヒークップを回しすぎ、ふらふらになって降りてきた友達もいました。

今のように、デジカメや携帯電話もなく、普通のカメラだって持っている子もなく、写真を撮ることもありませんでした。

動物と遊び、遊具で楽しむ子どもの心がまだ充分ありながら、一方では、友達との時間を大切に大切にしたい少し大人の心とがまじりあい、帰る頃になると、妙にみんな静かで、しんみりしていました。

クラスの中では、いくつか仲の良いカップルもいて、クラス分けの心配をしていました。

私は、東京の子があかぬけてとても格好良く見えていたので、そのすてきな何人かの男子といっしょに園にいただけで胸がときめいていました。

結婚して、近くに住むことになり、子どもを連れて井の頭自然文化園の水生動物を見たり、かわいい遊具に乗せたり、よく遊びに来ました。私の職場が変わった四十歳から十年間は、井の頭自然文化園の前を毎日バスで通勤することになり、ベビーカーの親子連れが園の門のところにいるのをバスの窓からほほえましく眺めました。両側の林の桜の時、青葉の光、紅葉と、季節ごとの木々の美しさは飽きることがありません。

そして、今でも決して忘れられないのは、あの春休みの梅の花の色と、少しもの悲しい水仙の澄んだ甘い香おり。思い出すたび、せつなくなり、一人一人の顔が浮かびます。